会報 松門

No. 4
昭和 62.3.1

• 松陰敬仰の気運醸成
• 松陰精神の継承普及
• 松陰教学の研究振興

○編集発行　財団法人松風会
〒753　山口市大手町2－18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

松陰北辺の旅

青森県　漆畑直松

嘉永四年（一八五一）、藩命によって江戸留学中の松陰は、家兄にあて「あなたの藩の人は国史に暗い」と友人に言われ恥かしい思いをしたと書いている。日本的自覚の深かった山鹿素行を先師と仰ぎながら、国史の素養に乏しかったのは、吉田家に素行の「中朝事実」（津軽藩出版）や「謫居童問」が伝わっていなかったからだった。

彼は前年、平戸、長崎に旅し家学の外、アヘン戦争や、ヨーロッパに関する本を読み漁り、オランダの軍船も兵学者の眼で確かめ、インドや中国を侵略したヨーロッパ諸国は、やがて日本に迫るだろうと予想したが、これから守らなくてはならない日本とは如何なる国なのか、わずかに「新論」にふれただけで皆目わからなかった。それと山鹿流兵学でヨーロッパの巨大な文明に対抗出来るだろうかという疑問も湧いていた。

江戸留学はこれらの疑問に答えを得ようということと、兵学を時代の要請に耐え得るものにまで高めようというものであったが、次第に失望とあせりが深まるだけであった。こういう時に友人の宮部鼎蔵から東北視察の話をもちかけられ、過所の交付をうけないまま脱藩し旅立ってしまった。

松陰道を往く

江戸を出た松陰は、水戸滞在約一ケ月、水戸学の権威から、日本の国柄を学び、特に桑原幾太郎からは、外敵が日本のどこを侵犯してもそれは神州全体の問題だと諭され、初めて目ざめたと述べている。その後、会津、新潟、秋田を経て弘前についたのは、嘉永五年二月二十九日で翌三月朔日、海防に詳しい伊東梅軒を訪ね二日間にわたり会談している。

伊東は若くして江戸で佐藤一斎に大阪で篠崎小竹に学び、四国、九州の沿岸防備を視察し帰藩後もその方面で活躍している視野の広い人であった。彼は津軽沿岸防備の実状や頻繁に出没する外国船の装備にふれ、藩では時代遅れとなった山鹿流からオランダ兵法にきりかえていることも語った。すでに外敵との実戦を経験している津軽に来て、山鹿流は過去のものとなったことを知らされ、松陰の衝撃は大きかった。図らずもこの後松陰は亡命の罪で、山鹿流兵学師範の立場を失なうこととなる。作家の邦光史郎も「外国船がよく現われるという津軽海峡を望む場所に立った時、松陰は自ら教える山鹿流では強大な外夷に対して何んの役にも立たないことをすべて悟っていた」と述べている。

弘前から寒風をついて、津軽半島を北上し絶険算用師峠をこえて三厩に辿りついた松陰は、外国船の自由に往来する海峡をながめ、この事は、津軽、南部藩だけの問題でなく「日本全体の問題」としてとりくむべきだと幕府の要人をはげしく批判している。そしてこの日は、奇しくも一年前藩主にしたがって萩城を立った日と同じ三月五日であった。

松陰にとって、北辺の旅の収穫は大きかったに違いない。私共はこれを縁として、竜飛崎に「松陰先生詩碑」を建て、算用師峠を整備し、関係市町村二十八が協議会をつくり、松陰先生の精神を県民運動にまで高めようと、その足跡を辿る行事などたえまない努力を続けている。本年度は、相馬大作と精神的出会となった矢立峠を整備する。

（青森県歴史の道整備促進協議会事務局長）
（住所　青森市松森字佃一七五）

吉田松陰の詩文

徳山大学教授　山中鉄三

松陰の詩・歌・句を三期にわけるとだいたい次のごとくなる。（大和書房版全集による）

期区分／ジャンル	詩	歌	句
兵学者時代（10代）	38	0	0
求道者時代（24才迄）	117	3	0
下田踏海後時代（30才迄）	518	106	63
計	673	109	63

今回は紙数の関係上、漢詩を中心に松陰の人間像をみる。詳しくは拙著「吉田松陰の詩藻」を参考にしてほしい。

一期兵学者時代の少年松陰は明倫館の教授格になっただけに兵学を通じての人生観の基盤を創る時代であるが、驚くべきことはこの期の詩はすべて風韻風趣、読書三昧、僧と語り畑をうち、魚を釣り、隠遁的超俗的趣味に終始し、脱政治的情趣に沈潜し、正に詩人的風雅の世界に逍遥することに徹していた。この隠遁的エネルギーは二期、三期には姿を消すが、二期の猛烈な求道探求の旅（約一万二千キロ、九州・四国・大和・中仙道・越国・青森に亘る吟遊詩人の旅）に於ける孤独や病疾の時に、又は三期の行動派時代の蹉跌の時や囹圄の時に、一期の自然人松陰の詩人的風雅の世界に回帰する詩が多い。一期の風雅詩は三八篇すべて風雅に徹しているが、右の回帰詩の六五篇ばかりを加えると、一〇三篇はすべて純粋な風韻に遊ぶ詩である。この風流的エネルギーと求道エネルギー或いは行動的エネルギーとの相関関係は、松陰研究の重大な要点だと思われる。

松陰一期のこの隠遁的乃至は風雅詩について触れて論じた研究書が無いので少し紹介してみることにする。

吟人閑にして事なし。急に筆硯を呼び詩句を思ふ。黄巻披き読めば至楽この中に在る。といった詩題に、瓶梅・春雨・春日遊歩・寓居雑詩などがあり、野水に吟遊し、禅牀に脚を信べ聊か睡を催す「禅房、榻を仮る」の詩を見る。また「酒家小樓」では「煙霞風月吟情迷ふ」と表白する。「林亭夏日」（松陰生家〈樹々亭〉を木々と酒落れて林としたものと思われる）では「林亭愛すべし自ら世塵を忘るるに足る」と脱俗の心を指向する。更に「豈に俗人を容るべけんや、山水は詩資に富み、短衣家の貧を忘る」と述べ自然人松陰の安心立命の境を示す。「人日訪山中友」でも「詩話文談風致多し、名利の人この中の真を知るや否や」と方丈記の口調でもって隠逸の境に安住する思いを語る。喫茶香煙を愛する詩に「春夜即事」「春雨」などがある。「立ちて石泉を汲み苦茶を煎ず、此の中の幽情亦俗には非ず」「雨声昼静読書家、磁鴨（鴨型の香炉）香煙直又斜」といった喫茶という風流事に身を置く松陰である。更に「夏日雑興」「夏夜即事」にも「枯坐すれば閑にして事なく、茶気香煙聊か歓ぶ」とか「嫩吹（微風）籬を渡りて暗麝を伝ふ」という茶や香に身を浸す詩境を愛した。

また松陰は漂泊隠遁性、吟人逍遥の詩質をみせている。「春日自咏」「又」の二題に「自咲此身無定所、杖鞋随処是吾家」「吟人の迂計、門を出て去り、却て涼林に向ひ晩花を尋ぬ」という。この漂泊性が二期の求道者の旅、吟人の旅につながるのかも知れない。この俗なる人間に非ざる世界を愛する思いを「漁樵閑話図」に「水悠々山畳々、塵外別有幽情愜」と述べ李白ぶりに「別有天地非人間」の風狂を提示している。松陰の詩人憧憬は強く随所の詩に覗われるが二期以後になると時務論詩の頻出につれて詩人になってはならぬと自省する詩文となる。思想家や行動者となるに詩は妨げとなると信じたからである。それを自戒しながらも二期以後の詩の中に十代回帰心ははからずも詩人となることを拒否できない事実を多く見受けるのである。一期の十代詩をみると、おしなべて松陰は詩人である。兵学者、思想家、教育者、学者、行動者であると同時に純正な詩人的素質を身に体した人であった。私が松陰生涯を一貫するものは詩人哲学者という所以である。松陰の論文、書簡、小説、歌句などをみても詩人的直観のひらめきを否定することはできない。

十代は、ともかく詩に憧れていた事実は「新夏即事」にも、「竹窓静座誦蘇詩」といい「春日遊歩」に「恨むらくわが文字に乏しく、詩料等閑に過ぐるを」と憧れながら詩才乏しきを歎くのである。「我は愚を守り」（「客中」）読書せねばならぬと「苦熱」の詩に述懐している。「山行雨に値ふ」に「他人解するや否や吟人の意」と言い、「舟遊」には「月に対し韻趣を発し、魚を釣るは塵機に非ず、問ふ勿れ多年心事違ふと」と述べるのもすべて詩人憧憬の心といっても過言ではあるまい。この風趣遊芸の心と反比例するものに兵書の不勉強を歎く「自嘲」の詩がある。又は「偶成」に「咲ふ我が吟哦癡癖の心」云々と、「かく詩文を学ぶは君上を欺く」云々と自戒の詩を残し、これは二期以降の松陰に引き継がれてゆくのである。終りに「初秋友に寄す」の詩は松陰の詩観を述べて重大である。即ち「言志寄詩寓箴戒」云々」であって、詩経に謂う「詩は志なり」

を詩にしたものである。この気持は終生松陰詩に一貫したもので、所謂抒情的詩文は「君上を欺く」結果となることだとして松陰は「詩人」になることを避けたのである。詩は情を表出するものでなく「志」を述べるものと固く信じたのである。松陰詩に自警、自戒、自省、箴戒、慨世、批判、訓戒などの多いのは思想家松陰の本領でもあり、右の信念の顕現と思われる。それは二期以降に花を咲かすのである。

二期は旅の求道者時代で松陰詩の本質は一応出揃うわけで、即ち時務論慨世詩、歴史風土詩、英雄偉人詩、望郷孝敬孝弟詩、挨拶存問詩などである。これらが三期の晩年になると更に多岐に独立分化し複雑に命題化されてゆくのである。それは、時に忘我的に己れを埋没するかの如くまた爆発的に己れを燃焼させるかの如く、静と動はこもごもに乱れるかに見えて、しかも乱れず、或いは矛盾の中に統一を求め、統一の中に矛盾を歎く、といった諸々のテーマを常に誠実に激烈に生き貫く松陰を詩に覗い見るのであった。そのテーマを整理して簡単に紹介してみることにする。ただ、テーマは一篇に纏まるとは限らず諸テーマが混然と挿入された長詩も多く篇数を明確に図ることの難しいことも断わっておく。

①忠義詩（忠孝一如、諫死思想詩、浩然の気詩など約30篇）
②危機感慨世詩（尊王攘夷詩、愛国国防詩など約45篇）
③英雄待望論詩（志の詩、草莽崛起論詩など約70篇）
④詠史詩（日本及び中国の志士英雄詩約80篇。特に中国の屈原・諸葛亮・陶潜・顔真卿・文天祥・劉因・王昭君・伯夷叔斉・岳飛など33人。日本の楠公以下風土に即した志士英雄多数）
⑤幕府批判詩（約35篇）「幕府は重く天朝は尊し」といった公武尊崇詩もあって強ち幕府打倒詩ばかりでないことは特に初期において顕著。また詠史詩に含まれた詩を加えると約80篇以上になる。
⑥人生観上の詩（死生観の詩を加えると百篇以上となる）私が「死の詩人哲学者松陰」という所以である。自警・自戒・自省自照の詩、浩歎慨世、憂悶警世など。また松陰は蹉跌の人生であり理解され得ぬ失望感の歎きの詩は随所に見受けられる。
⑦兵学者流の詩。特に纏まった詩篇は少ないが随所に見られる。山・海岸・湖などをみて戦略的視点に立って作詩する。これは人物論、歴史論、地理地形論に目立ち多く孫子の兵法などが裏づけされる。間諜論や軍事操練論などの詩がそれである。
⑧矛盾的重層の詩。人生訓的述懐詩、又は中国、日本の古聖賢やその著書に対する批判や感想詩の中に、時と場所に応じて尊敬し他の処においては否定するといった一見して逆説的に見られる視点を散見する。これは門弟、友人、同志に対しても見られることで、松陰の批判評論の精神の現われでもあり、教育者的指導精神の指導法でもある。人を見て教えを説く心である。才に応じ時代と環境に即しての方便であって、一つの定規的思想を万人におし当てない松陰の姿勢が詩に鏤ばめられ、矛盾を統一総合せんとする松陰の人間像を垣間みせるのである。
⑨尊敬者への奉呈詩。約65篇。その主な詩は、象山・黙霖・月性・鳥山新三郎（梁山伯とも云われ松陰が身を寄せた塾）周布政之助・大原三位（松陰が大原西下策を立てた京都の公卿）村田清風・前田孫右衛門など、また求道者時代に知った多くの人物に詩を呈している。松陰が詩や書簡を多方面にこまめに届けたのは情報蒐集の手段としても他に類を見ないほどの数であり、書簡に詩を添えるのも特色であり人間接触の方法であった。
⑩塾生友人に送る詩。約一五五篇。訓戒激励。教育者的檄、同志の契約、情報集めにも役立たせるため、多い時は一日に五通の書簡を書くこともあって気を抜く時がない精力である。玄瑞へ33篇、入江九一へ13篇、前原一誠へ7篇、富永有隣・金子重輔へ6篇、品川弥二郎・松浦松洞へ5篇、その他晋作はじめ多くの弟子へ詩を届けている。

松陰詩のフィナーレは縛吾集以下70篇で、刑死に赴く途次の詩は上述した松陰詩の諸要素を総花的に展開している。順を追って若干を紹介すると、望郷惜別詩、幕府感格詩、自然叙景詩、志と死に賭ける詩、感恩愛の詩、大義実現詩（楠公・大石良雄）英雄詩（秀吉）尊皇詩（京都恋闕）詠史詩（日本武尊・西行・曽我兄弟・頼朝義経、中国人では孔子・方孝孺・七賢人・屈原文天祥その他）慷慨詩、友情詩、義を守る詩、華夷の弁詩、仁政詩、死生詩、終りに「文天祥正気の詩」に答えて「松陰正気詩」で結び、あとは辞世詩まで一貫して死の覚悟詩であって静晏と動魄の詩を結んだのである。

事務局通信

昭和六十一年度の主な事業。

・会報「松門」発行、配布
九月一日　第三号（八千部）
三月一日　第四号（六千部）
・吉田松陰研究講座の開設　前年度に引き続き県生涯教育センターと共催し、県下十二市町村で開催、受講者千余名
・松陰教学研究会の開催　県小中・高等学校長会と共催で十二月二～三日山泉荘で開く、校長三十名参加、主題―松陰教学のよみがえる道―
・松陰先生の足跡をたずねる旅　平戸―長崎―熊本―柳川へ三泊四日で実施、五名参加
・吉田松陰輪読会　八月四日県教育会と共催、参加者六四名
・研究団体への助成　六団体
本年は特に全日中山口大会に松陰読本を二五二五部贈呈
・松陰先生関係図書購入・貸出
・松陰先生関係研究者に対する応対・講師紹介等　（谷口）

松陰の足跡をたずねて④

会津若松・佐渡

秋市末永明

水郡線点描

吉田松陰東北遊歴の跡を訪ねる私どもは、水戸から国鉄水郡線の列車で会津に向かった。

途中に『いわきたなくら』『いわきいしかわ』の駅がある。地図によると、いわきいしかわ駅あたりで、松陰が歩いた旧街道と国鉄が交差している。東北遊日記によるとこのあたりのことにふれて『山聳え道窄く田圃極めて少なじ。鎌田以北は少しく田地あれども亦磽确瘠鹵なり。其の山水は或は吟人墨客の観に適すと雖も、其の農桑の業に於ては困苦も亦如何ぞや。奥の棚倉は天下の瘠地と称す。今過ぎし所は棚倉を距ること甚だしく遠からざれば、則ち造り観ずと雖も亦推して知るべきなり…』とある。

天下の瘠地と称せられたこのあたりの田地も、今では農業基盤整備事業が進んで整然と並ぶ一枚三、四十アールの方形の乾田のあちこちに、収穫を終えたコンバインが淋しく放置せられている。この地の反収はいくらだろうかなどと推測する。

郡山あたりから小雪まじりの雨が窓ガラスを斜に走る。

白虎隊記念館

五合目まで雪化粧をした磐梯山、静かに水をたたえる猪苗代湖を車窓から眺め、野口英世の業績をしのぶ。

寒風に枯葉の舞う会津若松駅に下りたった私どもは直ちに白虎隊記念館に向かった。

白虎隊記念館

白虎隊娘子軍をはじめ、明治戊辰の役に徳川親藩最後の拠点として悲壮な戦を展開した会津藩と征討軍の三千余点にのぼる館内の資料は観る人の涙をさそう。そうした中で、藩校日新館絵図、同水練池、天文台跡の写真や、日新館の見学者として掲げられている吉田松陰、頼三樹三郎、佐久間象山の肖像画、「什の教育」等の写真資料は特に私どもの心をとらえた。

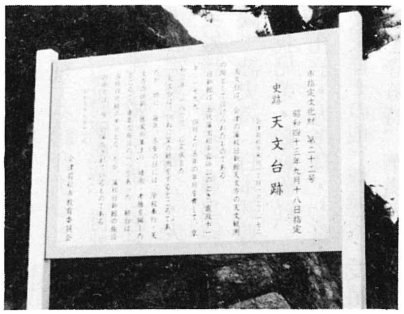
日新館

早くから教育のことに着目した会津藩では、寛文四年（一六六四）創立せられた稽古堂は元禄元年（一六八八）に武士の教育を対象とした講所となった。

天明八年（一七八八）の学制刷新によって、十一歳から十八歳までの諸士及びその子弟はすべて就学を命ぜられて一藩皆学の制度がとり入れられた。

寛政十一年（一七九九）藩主松平容保の命で藩校日新館が誕生、藩士は十歳前後から文武両道にわたって徹底した武士教育をうけることとなった。

黒河内伝五郎の案内で日新館を観た松陰は、敷地約二万平方米に及ぶ館の模様を『大門の扁に過化存神と曰ひ、中門には金聲玉振と曰ふ。門の左に大鼓を置き以て時を報ず。正面の聖堂を大成殿と曰ふ。堂の左右に四塾ありて生徒を置き、又習書・神道・和學・禮式及び學校の役所諸局あり。聖堂の右側に射場・馬埒及び印刷場・武藝師の家居及び剣槍場ありて以て其の外を圍む。東門の扁に日新館と曰ふ』と記しているが、戊辰の戦乱はこの建物を焼失させ、僅かに残る天文台跡と絵図で昔をしのぶばかりである。



日新館天文台跡

什（じゅう）の教育

藩では幼童教育にも大いに力を注ぎ、日新館就学前の六歳から九歳までの子弟は、一団十人前後の「遊びの什」という集団を作り、午前中は家庭での学習午後は集まって「什長」の「お話」という次の八ケ条の申し合わせを聞き、毎日の生活の中で「会津武士」のあるべき姿を身につけながら育てられたという。

一、年長者のいうことにそむいてはなりませぬ。二、年長者にはおじぎをせねばなりませぬ。三、うそをいってはなりませぬ。四、ひきょうなふるまいをしてはなりませぬ。五、弱い者をいじめてはなりませぬ。六、戸外でものを食べてはなりませぬ。七、戸外で女の人と言葉をまじえてはなりませぬ。八、ならぬことはならぬものです。

また、祖先をまつる仏壇の前で、母親から切腹の稽古もさせられたとも伝えられている。

会津の風

『近年幕命を奉じて戍を房総に置く。初め会津の地海に遠きを以て游泳及び操舟の術を知る者なかりしに、今は則ち漁父蜑丁にも勝る者ありと云ふ。近ごろ百幾撒（ベキサンス）西砲を鋳る。口径七寸余、長さ七尺余なり。又架砲船を作りてこれを城外の東の湖に試む』と記した松陰の日記から会津の風の一端を知ることがで

山鹿素行誕生地の説明板

きるし、「霰の如く乱れくる敵の弾丸引きうけて」遂に自刃した白虎隊士は、この地で生まれ会津の教育を身につけた十六、七歳の美少年達であった。

飯盛山に上り白虎隊士の墓に香を捧げる。松陰が「先師の行実に負くことなからんと欲す」といった山鹿素行誕生地を巡り、巨石に山口藩と刻まれた西軍墓地に参拝する。

西軍墓地

ともあれ会津は、武家の歴史と生死を共にした土地である。

真野御陵（佐渡）

「会津新潟を結ぶ国道は積雪のため通行止め」の放送を聞きながら新潟港へ急ぐ。低くたれこめた雲。荒浪にもまれてギューイーと船体をきしませる連絡船で佐渡両津港に上陸する。

〝ももしきや古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり〟の名歌を残された順徳帝の真野御陵に詣でる。規模は京大和のものと比べるとはるかに見劣りがする。松陰は『萬乗の尊きを以て孤島の中に幸したまふ。何すれぞ奸賊乃ち此れを為す』と、悲憤慷慨。心情を次の詩に托した。

異端邪説誣斯民
非復洪水猛獣倫
苟非名教維持力
人心將滅義與仁
憶昔姦賊乗國均
至尊蒙塵幸海濱
六十六州悉豺虎
敵愾勤王無一人
六百年後壬子春
古陵來拝遠方臣
猶喜人心竟不滅
口碑於今傳事新

同行の宮部鼎蔵も亦悲憤して

真野御陵前の建碑

陪臣執命奈無羞
天日喪光沈北陬
遺恨千年又何極
一刀不断賊人頭

と扉に題した。（東北遊日記）

参道の右手、御陵に正対して建つ凛烈萬古存の詩碑にこの二つの詩が刻まれ、裏面には「大阪市人日下伊兵衛浮田高太來拝皇陵見二先賢嘉永五年二月念八拝陵書于榜誦而感焉恐其久而漫滅乃謀勒之貞珉請余書之余乃欣然而應命焉

昭和十一年五月
浪華　藤沢　章誌」

と建碑の由来が記されている。方約百米の陵域に繁る老松は或は松陰の見た穉松の今の姿か。

佐渡金山跡

佐渡金山の跡を訪ねる。金山の象徴ともいわれる露頭鉱坑の「道遊の割戸」が、鉛色の空を背景にして大きく口を開く。

旧坑道に入る。油煙に汚れた曲折する坑道の奥から、機械を操るような異様な騒音に混じって、人の怒声とも思われる音が響いてくる。今もまだ採坑を続けているのかと耳を疑って進むと、眼前に異様な情景が展開する。そこには、金鉱石採掘現場を再現した大工・採鉱夫・荷揚夫・桶場の水替人夫に混って盗視役人などの電動仕かけの人形が配置せられ、録音テープによる役人の罵声までが流されて、視る人を恐怖の世界に引き入れてしまう。

佐渡金山坑内

松陰は鉱山吏松原小藤太の導きによって屏風鉱坑の採鉱製金の現場を観てその模様を『強壮にして力ある者と雖も十年に至れば羸弱用に適せず。気息奄々或は死に至る。誠に憐むべきなり』しかしこの鉱坑はまだよい方で『他山に至っては或は三、四年にして既に死に至る』苦役であり『之れを語るも亦以て金を視ること糞土の如き者の膽を寒うすべし』と記している。

当時の鉱山が、生地獄の相を呈していたであろうことは推察するに尚余りありと思われる。

坑を出れば空は前にも増して暗く、やがて、宿に急ぐ車の窓には大荒れの日本海の浪しぶきが間断なく襲いかかってきた。

波涛の海

旅の最後の夜を、風雪と日本海の怒涛の打ち寄せる相川の宿で過ごした私どもは、「本土行き便船欠航か」の報に、朝食もそそこに両津港に急行した。

聞けば、船は昨日午後から欠航しているという。今日の運航開始を天に祈る。　松陰の佐渡への旅は出雲崎での船待ち十一日。帰途は小木（おぎ）での船待ち六日と日記にみえる。

十一月初旬ですらこの事態である。冬の旅の苦難を推察しながら運航再開の船に乗った。

触れ合い響き合い

―松陰と清風―

三隅町　平川喜敬

昔から帝王や為政者の在り方を説き、またその輔佐の道をも説く帝王学とよばれる学問があった。わが国には、古く中国から移入され、歴代の天皇はじめ藩政期の藩主や、輔佐の任にあたる政経家学者らの治世のよりどころとされてきた。

「貞観政要」や「資治通鑑」などは、松陰や清風の時代に心ある指導者必読の書とされていたものである。

これらの書には、昔から中国の優れた統治下に於ては、諫議太夫という職制を置き、お上に在る者は求諫の手をさしのべる責任があり、下に任える者は納諫の義務があると説いたのである。

身分統制という縦の系列きびしい封建体制の中で、お上に意見苦言を訴え、政治のやり方まで改めさせようということは、命をはってかかる程の重大事であった。

この小文では、松陰と清風をその角度からのみとりあげてみたいと思う。

天保元年松陰誕生のとき清風は四十八歳、すでに清風は財政に通じたやり・・・での政治家であった。

第十三代藩主敬親が襲封し、財政改革の御前会議があった。清風は七ケ条の精魂こもる建白をした。松陰は、きびしい政局の中で清風に面識を持ち、漸くその意見を傾聴しようかとする頃であった。

老志士清風が、革新の風雲児松陰に大きい期待をかけ、あつい眼差しで声をかけていくのは、清風歿前の十年間ばかりのことである。

嘉永元年、松陰最初のオリジナルは明倫館学制の大改革についての意見書であった。

清風は勿論その時、国老益田元宣とともに明倫館再興学校惣奉行の要職にあった。

清風自身も積極意見の士であり、藩主敬親とのコンビによる「言路洞開」重視の構えは、松陰の力説する「聴政」の構えと全く揆を一にする、実践帝王学の発想であった。

この二人の触れ合いの十年間は、長藩の明るい明日への命運を拓くべく、共に命をはってかかる言論文筆活動の時代でもあったのである。

清風は恐れを知らぬ辣腕の老志士、松陰は利鎌の如き優秀な頭脳と燃える如き情熱の志士。

維新から維新後にまで響く如く長州藩の政局を切り開き、その基本姿勢づくりに与えた影響は、危機意識に燃えて実践帝王学の具現化に挺身したこの二人に負う所大なるものがあった。

ペリー来日をその目で鋭く観察して、その足で長藩江戸屋敷にとって帰し、火の玉の如き危機感をこめて提出したのが、有名な松陰の「将及私言」と「急務條議」であった。

その中で松陰は、国家の政体の根幹にふれることを言っている。迷雲をふっ切るごとき「天下ハ天朝ノ天下ニシテ乃天下ノ天下也幕府ノ私有ニ非ス」というのがそれである。

そして、「憎ム可キ俗論」として、「江戸ハ幕府ノ地ナレハ御旗本及ヒ御譜代御家門ノ諸藩コソ力ヲ盡サルヘシ國主ノ列藩ハ各其ノ本國ヲ重ンスヘキコトナレハ必スシモ力ヲ江戸ニ盡サスシテ可ナリ」を指摘するのである。それは、愚蒙頑迷に対する痛烈なる批判と藩政庁の腰の入れ方についての怒りの声であった。

さらに、松陰は、「聴政」の段にて、政務の非能率とマンネリをつき「宵衣旰食」を訴える。宵旰（しょうかん）とて、君主政堂は旦夕政務に精励すべきことを堂々と発言し、「直諫」の段にては、近来直諫の風儀が地を拂うが如く衰微して来たことは世も末である。いそぎ内外に言路を開き、上言したき者に対しては、深夜といえども出座してその言を傾聴すべきであるという。

お上こそ率先謙譲の美徳を発揮し、先づ何より「賢人を求める」姿勢に徹すべきである。面従腹背の徒は「口を箝（かん）して」語らざらしむるところに生じる現象であると痛論する。

さらに大事なことは、道徳に於ても正義に於ても東洋は優れているが、科学技術に於ては、素直にそのおくれを認め西洋に学ぶべきだとして、「砲銃」「船艦」「馬法」について改革の急務を説く。なお「将及私言」に併せ「急務條議」として、具体的な政局の打開策、防備の改善点を説いたのであった。

これと前後し、清風は、「遼東の以農古」「海防」「物頭心得」と矢つぎ早に上書する。

清風はその中で、「扶桑開国以来ノ大変也」として、智力勇力財力等各々持てる力を発揮して外夷防禦の国用に供すべしと老志士の心胸を吐露し、「時乎（ときか）今なり、勢は在上よりすべし、千言万句も身親ら行うにあり」と喝破する。さらに「某氏意見書」に於ては、條理を盡くして善政のありかたを説くのである。

ついで、「野に遺賢無く、言路開けて嘉言伏す」ことなく、「天下國家の善言佳猷皆上に達し、天子諸侯の賢智謀議の助けとなり、遍く四聴を達」し得てはじめて國家繁栄安寧であるともいうのである。

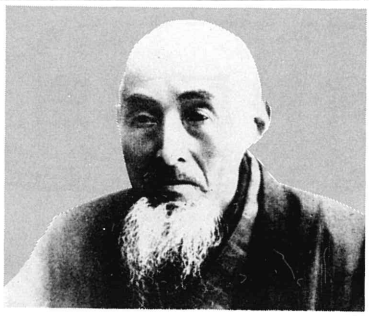
松陰と清風の十年間に及ぶ思想内容の中には、藩を大切にしながらも、藩を超えて、「統一国家の形成」を目ざさねば、「扶桑以来大変」のこの危局はのり切れな

松陰をめぐる人びと(3)

杉民治

石川　稔

杉民治、名は修道、字は伯教、学圃と号した。通称初の名を梅太郎と呼んだが、民政に多大の功績があったので、明治二年君命により民治と改名した。（以下梅太郎と呼ぶ）梅太郎は申すまでもなく杉百合之助の長子であり吉田松陰の兄である。松陰が短い生涯に偉大な事績を残し得たのは、天才松陰の資質は勿論であるが、慈厳兼備の両親と叔父玉木文之進等の主柱と、賢兄梅太郎の影の形に添う如き友愛との賜物であったことを見逃してはならない。



杉民治の像

梅太郎と松陰は二つ違いの兄弟であった。松陰は六歳で叔父吉田大助賢良の養子となり、養父の死後家督を相続するが、生活はそのまま杉家一族との同居が続く。

父百合之助はこの兄弟の養育には格別に意を用い、起居勤労等の生活日課は専ら父の基準に合流させ、敬神崇祖、忠君愛国の家風への浸潤、素読教育等の基礎的教養の習得に力を注いだ。慈兄賢弟の二にして一、一にして二の人間関係はこの幼少時の涵育薫陶の家庭教育によって完全に作りあげられたのである。

この兄弟の稀有の人間関係は嘉永四年十二月、松陰が亡命という形で実行した東北遊歴を契機として次第に顕著になっていく。松陰は亡命によって士籍家禄を失うが、家族はその素志の遠大なるを賞讃し温かく慰諭激励する。亡命の罪はなお藩典抵触を出でず、藩主の信頼厚き松陰はその内諭を待って翌年再度の江戸遊学に旅立つ。ところがこの年こそ松陰の生涯の岐路を決定する年となったのである。すなわち下田踏海事件がそれである。

当時兄梅太郎は仕官初期の時代であり、下田事件の折は相州御備場（海防屯所）で筆者役を勤めていた。しかし弟の責を負い辞表を提出し帰藩謹慎する。父百合之助も曽て「盗賊改方」という司法警察関係の職務に従事していたこともあり、屏居謹慎して罪を待つのである。

この事件以後松陰は江戸獄・野山獄等での獄窓生活、杉家における幽室生活（この間松下村塾の経営がある）、藩命による再入獄、更に東送処刑と自由行動の極度に制約された五年有半を過すこととなる。この長期に亘る不如意の間、松陰にとって唯一の救いは杉家一族の温かい扶助と激励であった。特に兄梅太郎は両親の慈意を体して松陰の身辺に扶助の手を差しのべ、松陰の手足となってその達意を辨ずるのである。

思うに中村助四郎の指摘する如く（杉民治先生伝）、梅太郎と松陰との間には忠孝両全の黙契があったかと思われる。嘉永四年江戸留学中の松陰に、梅太郎は自作の詩を送り批判を求めた。その返書に松陰は概ね次のように述べている。

「阿兄は杉家の嫡男であり、両親弟妹に対し孝養庇翼の大任がある上に、官務家事に頗る多忙な職責であるから、徒らに詩文の末技に捉われて、勧農富民等の実学実践の事業を等閑視されては遺憾である」と、暗に長兄は自分と異なり、官職家事を抛擲して国事に奔走する余地のないことを言い、忠と孝とは相互に分任して両全ならしめようと提言しているかに思われる。又、安政元年江戸獄から兄宛の書簡の中にも「国の為には如何相成り候とも少しも残念とは存ぜず候。又是れにて父母の名も忝しめ申さず候。但だ父母へ対しては不孝此の上なく恐れ入り奉り候へども、忠孝両全ならずの古言も之れあり候間、宜敷く御諉（おんわび）、呉々も頼み奉り候」とその意を繰返している。

梅太郎の書簡中からその片鱗とも見るべきものは、安政四年松陰宛の復書の中に「…冀くは世故を以て胸懐に介するなかれ、而して事を省き志を専らにし、汝の初志を償い、親戚朋友をして、失望せしむるなかれ、若し或は聞問不致を以て罪を問う者あらば、請う咎を愚に皈せよ、愚将に東奔西走家々に至り、人毎に謝し、敢て汝を煩わさず、汝勉めよや、勉めよや云々」と激励している。これは明らかに公事と私事を分任し、相互に忠と孝とを完全ならしめんと欲する意思の閃きが感知せられるのである。文久三年四月吉田家の再興は梅太郎の長子小太郎が九代当主に命じられた。

梅太郎は当島浜崎御代官見習、世子待講、奥阿武宰判、玖珂山代宰判等の要職をつとめ、特に飲料水に難渋していた萩越が浜に水道「休労泉」を設置し、又奥阿武宰判各村畔頭（くろがしら）に、鉄製風呂釜を敷設するなど、民政に多大の功績を遺した。

明治十三年松下村塾を再興し自ら塾主となるが二十五年閉鎖、その後萩私立修善女学校長に就任、明治四十三年八十四歳をもって逝去した。

いとする危機意識と、具体的な政局の打開策に於て、多分に揆を一にして響き合う点の濃厚なるものあるを感じざるを得ない。

清風の訃報に「大恩師逝きたり、嗚呼」と野山獄に悲憤慷慨の涙をのんだだけ、松陰の危機意識と難局打開についての論法は、老志士清風のそれよりさらに一層深刻であることを思わないわけにはいかない。

資料展示室

吉田松陰先生関係図書

（つづき）

・吉田松陰全集（復刻版）山口県教育会　岩波書店　昭61
・松下村塾零話　天野御民　山陽堂　明30
・吉田松陰言行録　広瀬豊　三省堂　昭14
・吉田松陰正史　斎藤鹿三郎・斎藤直幹　第一公論社　昭18
・新日本の光　吉田松陰　山口県教育会　昭34
・吉田松陰　岡不可止　角川書店　昭34
・松陰余芳　松陰先生百年祭記念事業推進会　山口県教育会　昭34
・松陰語録抄　山口地方教育関係者新年懇話会　同上　昭35
・松陰餘話　福本椿水　山口県人会　昭41
・玖村先生講演録吉田松陰の思想と生涯　山口銀行厚生会　昭43
・吉田松陰武と儒による人間像　河上徹太郎　文芸春秋社　昭43
・吉田松陰先生御遺稿集　秋山四郎　松陰遺墨展示館　昭43
・書きおろし歴史シリーズ吉田松陰　山岡荘八　学習研究社　昭44
・吉田松陰と僧黙霖　村岡繁　松陰遺墨展示館　昭46
・松陰吉田寅次郎　村岡繁　松陰遺墨展示館　昭47
・吉田松陰を語る　村岡繁　松陰遺墨展示館　昭48
・吉田松陰入門　山口県教育会　大和書房　昭50

獄中聞渋木生赴

・象山と松陰　信夫清三郎　河出書房新社　昭50
・松陰―その叛逆の系譜　栗原隆一　今井恒雄　昭50
・萩と松陰　村岡繁　新日本教育図書　昭51
・物語と史蹟をたずねて吉田松陰　徳永真一郎　成美堂出版　昭51
・異人の見た吉田松陰　島幸子訳　条例出版　昭51
・吉田松陰―維新を先駆した吟遊詩人　古川薫　創元社　昭52
・草莽吉田松陰　寺尾五郎　徳間書店　昭52
・新日本思想大系54吉田松陰　吉田常吉　岩波書店　昭53
・叢書日本の思想家48吉田松陰・西郷南州　山田道夫　和田正俊　明徳出版社　昭54
・吉田松陰　池田諭　大和書房　昭54
・松陰読本　萩市教育委員会　山口県教育会　昭55
・吉田松陰をめぐる女性たち　木俣秋水　大和書房　昭55
・特別展生誕百五十周年記念維新の先覚吉田松陰　山口県教育委員会　同上　昭55
・景仰吉田松陰先生　吉田松陰形像移管連絡協議会　昭56
・松陰読本　萩市教育委員会　青森県歴史の道整備促進委員会　昭56
・適塾と松下村塾　奈良本辰也　祥伝社　昭57
・吉田松陰（岩波新書）奈良本辰也　岩波書店　昭57
・吉田松陰　三浦実　貝原浩　足立秀夫　現代書館　昭57
・徳山大学研究叢書―吉田松陰の詩藻　山中鉄三　徳山大学総合経済研究所　昭58
・翔べわが志士たち―吉田松陰　古川薫　創隆社　昭58
・幕末維新の思想家たち　山田洸　青木書店　昭58
・吉田松陰を語る　村岡繁　白鳥庵史荘　昭58
・松下村塾と松陰遺墨展示館　松陰遺墨展示館編　昭58
・吉田松陰その人と生涯　武田八洲満　金園社　昭58
・松陰教学シリーズ　松陰の教学と杉家　三輪稔夫　石川稔　松風会　昭59
・吉田松陰のすべて　奈良本辰也　新人物住来社　昭59
・日本の名著31　吉田松陰　松本三之介編　中央公論社　昭59
・吉田松陰　冨成博　長周新聞社　昭59
・日本の宗教的人間　津名道氏　河出書房新社　昭60
・吉田松陰と教育　折本章　同上　昭60
・史伝吉田松陰　木俣秋水　大和書房　昭60
・山口県教育史　山口県教育会　第一法規　昭61
・吉田松陰の恋　古川薫　文芸春秋社　昭61

（谷口）

（編集後記）

●編集子病臥のため万事不如意ご迷惑を多謝深謝、多謝深謝。
●執筆者先生のご努力とご協力により、スペース制限にも拘らず豊かな内容と清新なイメージをお添え頂き感謝感激。
●漆畑先生には特に申訳なし。
●山中先生の玉稿をヒントに、松陰の名詩文にお親しみ下さい。
●「足跡をたずねて」は、詳述を乞い質問の向きも予想、後日を期して新発想練成中。
●平川先生は僅か十年間の「触れ合い響き合い」の中に千鈞（きん）の重みをご指摘、清風に開眼。
●非才に盲（めし）いて「めぐる人びと」を執筆、無策無謀、折を見て適任者にご依頼。
●全般的にご意見ご希望ご忠告を期待熱烈歓迎。

（石川）